

陳舜臣さんを語る会通信

NO.69

May. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年5月15日

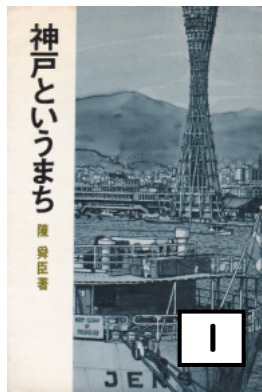
題名に「神戸」が付いた『神戸というまち』『神戸ものがたり』『神戸わがふるさと』

本号では、陳舜臣さんの著作で、題名に「神戸」が付いている3冊を紹介いたします。『神戸というまち』と『神戸ものがたり』は、内容に加除があり、改題もされていますがもとは同じ本といえます。

下の枠内、傍線は編集委員の加筆です。

(編集委員 橘雄三)

『神戸というまち』『まえがき』より抜粋



至誠堂新書19 (1965)

神戸を書くのは、私にとってかなりシンドイことだった。ガイドブックならいくらでもあるから、神戸の町の核心にふれたいと思ったが、それがきわめて困難な作業であることは、書いているうちにいやというほど思い知らされた。

自分がそこで生まれ、そこで育った土地なのに、なぜこんなに書きにくいのか、ふしぎでならない。身近かなことはかえって書けないといわれる。先入観が山ほどあり、しかもなかなかつき放して観ることができないものらしい。

けっきょく実感的神戸論になった。独善や独断があるかもしれない。これはけっして本格的な神戸論ではない。気らくに書いた。私には気らくに書くよりほかに方法がなかったのである。ただ神戸にたいする私の愛情が、なるべくかんだかい音をたてないように心がけた。

『神戸ものがたり』『まえがき』より抜粋

十六年前に、私は至誠堂新書の一冊として、『神戸というまち』を書きおろし

た。けれども、その後十六年のあいだに、神戸は大きく変わった。私にとつて愛着のある著作であるが、そのままのすがたでは、現在に通用しない。

たとえばポートアイランドである。『神戸というまち』のなかに未来の夢と



平凡社 (1981)

してすこしふれている。けれども、この夢は現実となつて、いま私たちの前にそのすがたをあらわしているのだ。

反対に私たちの前からすがたを消してしまったものもすくなくない。ジャンジャン市場がその一例である…。

筆者が十六年前の自分と対面するおもいで、そぎおとすべきものをそぎおとし、若い筆による骨格をできるだけ残し、一部を書き加えたのが本書である。

平凡社ライブラリー『神戸ものがたり』『まえがき』より抜粋

神戸のことを、私のはじめてまともに書いたのは、『神戸というまち』(至誠堂新書)と題する作品である。昭和四十年の発行で、小説家として出発した私にとって、小説以外では処女作であった。『神戸ものがたり』が世に出て、奇しく

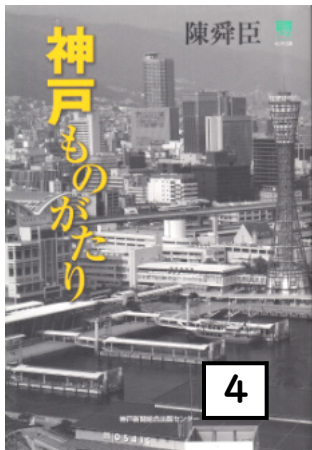


平凡社ライブラリー
228 (1998)

もまた十六年目のいま、それを文庫化する話が出た。
本来なら、『神戸ものがたり』は、それほど大きな改訂をしなくてもよいはずだった。ただつらいことがあった。つけ加えなければならなかった。それは一九九五年一月におこった地震のことである。それを最後に言及するだけにとどめよう。

神戸新聞総合出版センター発行
『神戸ものがたり』巻頭コメント

本書は一九九八年、平凡社ライブラリーとして刊行された『神戸ものがたり』に、二〇一〇年から一年にかけて、神戸新聞日曜朝刊に連載された「わが心の自叙伝」を加え、一冊にまとめたものです。



■のじぎく文庫の一冊
2017発行

「神戸というまち」内容の加除と改題

1. 神戸というまち(章立てと補足)		2. 神戸ものがたり	3. 神戸ものがたり	4. 神戸ものがたり
		新しい土地 *3	新しい土地	新しい土地
金星台から	諏訪山金星台に立てば神戸の中心が一望できる *2 ■海軍官之碑	金星台から	金星台から	金星台から
異人館地帯	トア・ロードを横切った山手一帯	異人館地帯	異人館地帯	異人館地帯
南北の道	トア・ロード、フラワーロード、居留地	南北の道	南北の道	南北の道
布引と六甲	モラエス、グルーム	布引と六甲	布引と六甲	布引と六甲
二つの海	神戸港、須磨・舞子	二つの海	二つの海	二つの海
軽い精神	神戸の精神 "軽さ"	軽い精神	軽い精神	軽い精神
あの町この町 *1	山の手と下町、元町商店街と三宮センター街、楠公さん三越を中心とする旧都心	あの町この町	あの町この町	あの町この町
そぞろ歩き	盛り場の一位は新開地で2位が三宮だった。その地位は神戸の重心の東漸と映画の不振で逆転。ほか、有馬温泉、灘五郷など ■神戸には歴史、伝統がない	そぞろ歩き	そぞろ歩き	そぞろ歩き
水と火	昭和13年の大水害と昭和20年の空襲	水と火	水と火	水と火
夢のかけ橋	明石海峡に「夢のかけ橋」計画	ふりむかず *4	ふりむかず	ふりむかず
			一月十七のこと *5	一月十七のこと
				わが心の自叙伝 *6

(補足) *1 陳さんは小学校へ入る前、三越の近くに住んでいた。三越の陳列ケースの赤い靴の話や、忘れた日本語を思い出すために荷馬車の前に飛びだした話など *3 ポートアイランド完成

*4 「夢のかけ橋」の前半を「ふりむかず」と改題し掲載 ■神戸はフェニックス *5 阪神淡路大震災

を「わが心の自叙伝」の執筆について、詳細は本通信第17号をご覧ください。

わが心の自叙伝
陳舜臣

→1
(写真は筆者、題字は妻・未知さん)

二〇一七年発行の『神戸ものがたり』の一番の特長は「わが心の自叙伝」が収録されていることです。陳舜臣さんの自伝といえば、まず、『青雲の軸』（一九七四年旺文社文庫）があります。これは小説です。エッセイは三つあります。最初は『道半ば』（二〇〇三年 集英社）です。次は、「私の履歴書」（二〇〇四年 日本経済新聞連載）で、もう一つは、「わが心の自叙伝」（二〇一〇年―二〇一一年 神戸新聞連載）です。

(補足) *6 「わが心の自叙伝」を収録

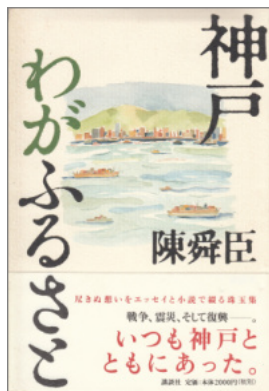


(補足) *2
諏訪山から見た神戸市街
2020年11月 編集委員撮影

エッセイ17編、小説9編 『神戸わがふるさと』

題名に「神戸」が付いている作品のもう一つ、『神戸わがふるさと』（講談社 2003）を紹介いたします。エッセイ風のタイトルですが、分量的には、四分の三は小説で、ミステリー中心です。

目次
序 慟哭の世紀
第一部 エッセイⅠへ
私の好きな道
神戸と私
神戸港
我が師の恩
神戸新聞平和賞五十年
『神戸っ子』と私の三十年
須磨寺と私
異人館のこと
次の世代に伝えよう
第二部 ノベルズ
S君に 気になる男 遠矢浜心中
拾われた男 半月組 山のアパッチ
さよならショー 霧の鍵 残った石
第三部 エッセイⅡへ
神戸よ
神戸よ、全世界に発光するのだ
生きる喜びと温かい友情
震災一周年にあたって
私たちは語部になろう
偶成
まだ見えぬ「美わしの神戸」
あとがき



講談社版表紙

「あとがき」から抜粋引用
傍線は編集委員の加筆

神戸は私のふるさとである。

エッセイも小説も、神戸のことについてなら、ことさらに取材しなくてもよいので、ついとりあげてしまうのである。

序に置いた文章は、神戸生まれの私の二十世紀総括である。

『須磨寺と私』という文章は、『須磨寺―歴史と文学』にのせたものである。須磨寺刊行で、こういうものは東京の編集者の目にとまりにくく、これまでエッセイ集に拾い上げられなかった。そういったエッセイを集めてみた。なおここに載せた二首の絶句は、須磨寺正覚院住職の三浦真蔵さんのご努力で、竜華橋のそばに詩碑を立てていただいた。私の拙い字だが、この碑の除幕式の行われた翌年（一九九四年）私は脳内出血でたおれ、右手が不自由になったので、いまはこれ以上の字をかくのが困難になっている。エッセイのⅡは、震災以後のもので、神戸とともに奮い立とうと、自分をも励ましながら書いた文章である。

二部のエッセイに小説作品群が挟まれている。一九六〇年代の作品がおもで、自分でも古すぎるとかんじていたが、読み返してみると、巧まずして当時の神戸がえがかれていた。これは神戸の語り部としては、残しておきたい作品だと思う。

あとはプライバシー問題で、これまで収録を遠慮していたが、すでに歴史として語られていることなので収録することにした。

二〇〇二年十二月

陳舜臣

七言絶句二首 須磨寺にて

上掲「あとがき」傍線部分、陳舜臣さんの七言絶句二首の詩碑ですが、1993年の除幕式当時は下の画像のような風景だったと思われます。それが、2022



blog.goo.ne.jp/chiku39 より



年5月、編集委員が須磨寺を訪れたとき、詩碑が立つのは、上の画像のような窮屈な場所になっていました。場所は同じですが、前には大きな永代供養堂ができ、横には川柳の碑ができていました。どうしてこんなことになったのか、首をかしげてしまいます。

『神戸わがふるさと』所収小説各編内容 及び補足

題 初出	『神戸わがふるさと』 各編内容紹介
S君に 初出不明	「ぼく」たちの小学校の同期生にS君がいた。ぼくはS君の家へよく遊びに行った。なぜ、ぼくだけが誘われるのか、やがて、その理由がわった。S君のお父さんは中国人だったのだ。Sというのは日本人のお母さんの姓だった。ぼくははじめてから陳と名乗っていたので、ぼくに親近感をもっていたのだろう
気になる男 『週刊小説』 1976年5月3日号	「ぼく」は、諏訪山小学校に2年間、転校して神戸小学校に4年間在籍し、昭和11年に卒業した。ところで、小学校6年間を通じてぼくは向上心をもったおぼえがない。父がそんなぼくを励ますために挙げたのが「優等児」のCだった。一高から京都の大学に進み、考古学を専攻、関西の某私学の講師をしているという噂だった。ぼくは、戦後台湾へ帰省して、また神戸に戻ってきた昭和24年、偶然Cと出会う
遠矢浜心中 『小説セブン』 1969年6月号	和歌浦で旅館を経営する32歳の女性が惨殺される。桂政彦は事件を調べるため和田岬の根もとにある遠矢浜へ出かける。政彦は、被害者とその地の水村船舶工業(株)の営業課長岸原保との関係を掴んでいた。まず、付近の食堂とスタンドで探りを入れ、続いて、興信所の者となのり、直接、会社に電話をかける。政彦は、社長秘書の吉田久代と喫茶店で会うが、互いに、“同じ種類の人間”を感じる
拾われた男 『別冊アサヒ芸能』 1968年初夏号	弦井宏次は外人専門のポン引きだった。ある日、神戸元町の路地でポール・グリーンに出会う。グリーンは、アメリカ政府の対外援助関係を代行する会社TGPエンタープライズ社長の個人顧問だという。そして弦井はグリーンに英語力を評価され、「しばらく私のアシスタントになって働いてみる気はないかね」と誘われる。さて…
半月組 『宝石』 1962年6月号	中秋の名月の夜、用を足そうと入った路地裏の廃墟で酔客が目にしたのは…。半月組の仲間内で殺人事件が起こり、身内を裁く最中であつた。やがて、場を仕切っていた組員が犯人を突き止め、いまにも私刑がおこなわれようとするが…
山のアパッチ 『小説サンデー毎日』 1971年12月号	山のアパッチとは、六甲山のドライヴウェイなどで、車絡みの犯罪を犯すグループのこと。山のアパッチのリーダー伊藤利夫がモーターバイクで転倒事故を起こすが、大原警部補らの捜査で事件であることが判明する。山のアパッチのかつての被害者森井修とその姉らを巻き込みストーリーは展開する
さよならショー 『講談倶楽部』 1962年11月号	その日、歌手数島真紀子の引退記念「さよならショー」の放映が始まる少し前、須磨の高級アパートでボイラーが爆発、ボイラー室にいた経営者が即死するという事故があり、また、「さよならショー」が開催されている時間帯に、裁判所近くの事務所で代書屋が殺されるという事件がおこる。この事件で、刑事の高杉は、定職のない三十男、小倉修吉に任意出頭を求める
霧の鍵 『別冊小説新潮』 第72号 1968年	日下部登美子は、親から受け継いだ三千万円以上の遺産を含め、なにもかもロバート・フレデリックスに吸い取られてしまう。財産をぜんぶまきあげてから、ロバートは急に冷たくなった。登美子は死ぬまえにもう一度ロバートに会いたかった。彼に会うというのは、殺すためだったのだが…
残った石 『別冊サンデー毎日』 1969年新春特大号	主な登場人物■川越悠吉：自動車修理工、竹沢利一と安アパートの一室に同居、二十歳。四歳の時に父親を、一年前に母親を亡くす。竹沢利一：神戸のBホテルのボーイ、二十歳。故郷の岡山で両親は健在。福本芳雄：中央軽金属(株)社長、観光ホテル建設の計画をもつ。ストーリー■母の死は福本芳雄のせいと信じる川越悠吉は、福本殺害を企み、宿泊するホテルの部屋に侵入するが…



「神戸小学校発祥の地」碑 左手は県公館

小学校のころのことは「S君に」にも出てきます。
右の記述の「県庁前の神戸小学校」の敷地は、いまは、神戸市立生田中学校になっていて、北西隅、フェンス沿いにある「神戸小学校発祥の地」碑が當時を物語っています。碑の半分は、若杉慧作詞の校歌です。

「気になる男」の記述です。
ぼくが県庁前の神戸小学校を卒業したのは、昭和十一年のことである。
諏訪山小学校に二年までいて、引越したため、三年から神戸小学校に転校したのである。

「神戸小学校発祥の地」碑